

父が私に与えてくれたもの

Keeping my father's memory alive

植田 由希

Ueda Yoshiki

南アフリカと日本での子ども時代

南アフリカ人の父と日本人の母の間に生まれた私は、5歳までをアフリカ大陸の南端、南アフリカのケープタウンで過ごしました。20年以上も前のことで、当時の記憶はほとんどありません。それでも、保育園で人形の形をしたジンジャーブレッドをつくって、父にプレゼントした日のことや、家の庭で兄や姉たちにボール遊びをしてもらったこと、大の運転嫌いだった母が顔をこわばらせながら保育園まで私を送る朝の様子など、断片的に覚えていることがいくつかあります。こうした思い出は、5歳で日本に来てからも懐かしんで振り返ることがあったからこそ、今でも覚えているのでしょう。

ただ、当時の私が南アフリカに帰りたくないとホームシックを感じていたかという点、そんなことは全くなかったようです。千葉の保育園に通いはじめた私は、すぐに毎日遊具で遊ぶ仲間ができ、休日にも一緒に近所の公園に出かけるようになりました。家では、せっかく覚えた言語を忘れないようにと英語で話しかける母に、「僕たちは日本にいるんだから、日本語で話さないとおかしい!」と言って、英語を使うことを拒否したそうです。

今となっては悔しい判断ミスですが、当時の私は無意識に周りの子どもたちに馴染もうとしていたのだと思います。まだ年齢が5歳だったこともあり、新しい環境にすばやく溶け込んだ私は、小学校、中学校と地元の学校に通い、周りの人にも恵まれて、日本での生活を送っていました。

反アパルトヘイト運動のリーダーだった父

ミックスルーツや複数のバックグラウンドをもつ子

どもは、あることをきっかけに自分のルーツを再発見したり、アイデンティティの多面性を認識し始めたりすることがあると思います。私にとっては、13歳のときに父を亡くしたことがそのきっかけになりました。

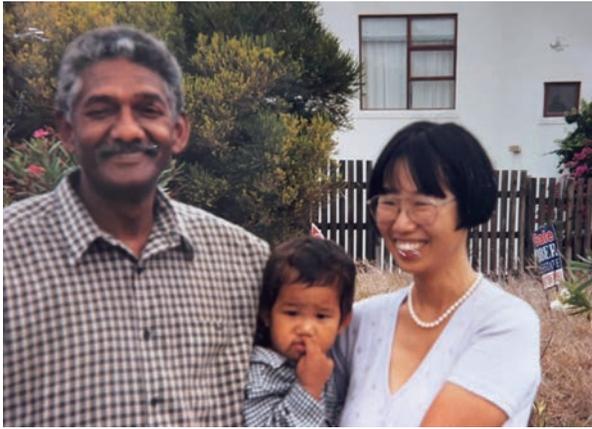
南アフリカに住んでいた父とは、2、3年に1度は会っていましたが、会えない間も毎月のように国際電話をかけ、日本での生活や私が7歳から続けていたサッカーのことなどの話をして、よく聞いてくれました。中学生という多感な時期になると、素直にそのことを喜んだり、表現することはできなかったのですが、今は本当に感謝しています。

父を失ったことで、自分と父親をつなげてくれるものは何かを考えるようになりました。南アフリカ人としての自分のルーツに目を向け、父から譲り受けたであろう性格や才能をもっと自分のものにしたいと感じるようにもなったのです。それから私は、頻繁に父の話をも母に聞くようになりました。

父、ジョニー イッセル (John James Issel) は、1960年代、10代前半から反アパルトヘイト運動に関わり、労働者の権利獲得にも力を注ぎました。1983年に400以上の反アパルトヘイト運動団体が集結したUDF (統一民主戦線: United Democratic Front) の設立メンバーでもありました。UDFは団結した大きなうねりとなり、アパルトヘイト撤廃への大きな前進につながりました。しかし、白人政権による弾圧は残虐で、父は何十年にわたり常に警察に監視され、逮捕・拘禁・投獄されたり、拷問を受けることが度々あったのです。

1994年、初めて全人種参加の選挙が行われ、ネルソン マンデラ (Nelson Rolihlahla Mandela) が大統領に就任し、新生南アフリカが誕生しました。父は、西ケープ州の州議会議員に選出されました。今年2024年は、それから30周年になります。

うえだ よしき：1997年、南アフリカ・ケープタウン生まれ。父は南アフリカ人、母は日本人。5歳で日本に来て、高校まで千葉で育つ。2020年国際基督教大学 (ICU) 卒業。特に政治哲学について学び、卒論では沖縄の基地問題をテーマにした。現在はインド系のIT企業で働きながら、パレスチナに連帯する活動に力を注いでいる。Instagram : yoshiki.ueda



父は人前で演説をするのにとっても長けていました。父の同志や母から聞いた話では、父が話を始めると皆がその言葉に聞き入り、スピーチの最後には何千人という観衆の気持ちが一いつになったそうです。その父から受け継いだ特性のひとつが、私の大きな地声なのだと思います。ケープタウンで通っていた幼稚園ではよく歌の発表会があったのですが、私は毎回誰よりも大きな声で歌っていたそうです。

日本に来てからいくぶんシャイになってしまった私は、人前に立ち注目を浴びるようなことを避けていましたが、父の活動家としての一面を知ったことで自分も人前で話すことに挑戦したいと思いました。父を亡くした半年後、中学3年生の時に千葉市の中学生弁論大会に出場し、父を亡くしたことで自分に起きた変化についてスピーチし、優勝することができました。自分はやはり父の子なのだと感じられた瞬間でした。

父とのつながりを見つける旅

父とのつながりを見つける旅は、今も続いています。昨年も2週間、ケープタウンに行き、父と反アパルトヘイト運動で共に闘った人たちや、きょうだいから、父の話を聞いたり、父のゆかりの場所を訪ねたりしました。私は日本では一人っ子ですが、母が違うきょうだい（姉や兄たち）がおり、皆とてもかわいがられて、強いつながりがあります。

父が私と同じようにカレーをつくるのが好きだったことも知りました。南アフリカでは親族や友人が集まると、Braai（ブラーイ、日本でのバーベキュー）といって、肉や魚を炭火で焼くのが定番なのですが、父だけはいつも肉を焼く横で、カレーを作っていたそうです。父を知る人から、「あなたのお父さんにはカレーをよくごちそうになったよ」と言われました。私は、スパイスをたくさん買い込み、本格的なカレーを作るのが好きなのですが、それを聞いてから、カレーづくりが一層楽しみになりました。



反アパルトヘイト集会でスピーチする父

撮影年不詳、南アフリカ



パレスチナでの虐殺を止めたい

今私は、民間企業で働きながら、パレスチナでのイスラエルによる虐殺を止めるために日々活動をしています。パレスチナ連帯デモに参加したり、国会議員に連絡を取ったり、1日も早くパレスチナが解放されるために、自分ができることを全力でやっています。そこには、ひとりの人間として正しい行動をするという理由もありますが、父や南アフリカの人々が命をかけて闘ってきた自由への想いを自分も引き継ぎたいという気持ちが強くあります。

父はある時、「もしも他の国の人たちが南アフリカで起きていることに無関心だったら、自分はきっと監獄で殺されていた」と言いました。南アフリカで起きていることに、世界中の人々が声を上げて、連帯してくれたおかげで、南アフリカのアパルトヘイトが終わり、自分は生まれてくることができました。パレスチナの子どもが同じように感じられる日が訪れることを切に願っています。